

## 生涯学習支援事業報告

事業の名称	東北大学オープンカレッジ 「杜のまなびや」	事業代表	野口 和人
目的	地域社会に対する貢献の一環として、また、インクルーシブ教育の発信としてオープンカレッジを位置づけ、知的障害者の生涯学習にかかわる支援を行う。また、受講生・企画運営スタッフ・講師が「学び」の意味を再考する場とする。		
対象者	知的障害のある学外受講生 宮城県内の大学・大学院に在籍する学生		
内容	<p>本事業は知的障害者の生涯学習を支援する取り組みであり、知的障害者の学習ニーズを探りつつ、大学の持つ専門性を活かした学習プログラムの提供と援助方略を模索すること、そして受講生(知的障害者および大学生)の意識変容を探ることを目的としている(川住, 2007)。しかしながら、取り組み開始から10年を経て、幾つかの課題が生じてきた。とりわけスタッフの大幅な減少(また、それに伴い事業実施日程の確保がきわめて困難になったこと)という実施体制上の問題が生じているなか、昨年度はこれまでの講義内容、参加者数を整理することを通じて、今後の事業の在り方に関する示唆を得ようと試みた。一方、本事業においては、知的障害者の学びや学びの場を保障することに加え、オープンカレッジを実践的研究の場と捉え、効果的な学習プログラムの開発および受講生の意識の変容に関する研究を進めてきた。今回は、これまでの研究内容を再確認することを通じて、今後の事業設計について示唆を得ることとした。</p> <p>なお、今回の検討についてはスタッフの藤村が中心となって行った。</p> <p><b>【2008年度】</b></p> <p>①研究題目: オープンカレッジにおける知的障害者と大学生との共同学習—話し合い場面における発言率の分析を中心に—</p> <p>②概要: 受講生の発言率を分析し、話し合うテーマが知的障害者の発言率に影響すること、大学生の役割分担の違いがグループ内の発言率の違いとして示されること、知的障害者は会話を通じた他者との関係の中で自分について考える機会をもつことが示された。</p>		

**【2009年度】**

①研究題目：知的障害者と大学生が共に学ぶオープンカレッジの意義 — 講師をした大学教員の気づきより—

②概要：担当講師の講義前後の発話内容を分析した。オープンカレッジの意義に関わることとして、知的障害者に対する理解の深まり、近接領域に対する知見を得る端緒となっていること、知的障害のある受講生の特性に応じた講義を構想する必要性を認識する機会であることが示された。

**【2010年度】**

①研究題目：オープンカレッジにおける知的障害者の生涯学習支援に関する意義 — 受講生の家族へのインタビューを通して—

②概要：知的障害者の保護者の考えるオープンカレッジの意義としては、生涯学習の機会や場の保障が挙げられた。講座内容については、抽象的な内容のものは難しいと考えていた。その一方で、進行の工夫については良い評価をしていた。

**【2011年度】**

①研究題目：知的障害者と大学生が共に学ぶオープンカレッジにおける大学教員講師の意識と講義展開

②概要：講師の講義前の意識と講義当日の言動を整理した。知的障害のある受講生に対する意識が、受講生への対応や教授方法に反映された。また、講師の専門性や知的障害者の捉え方の違いが、受講生の共通性と差異性の認識、個人へのアプローチに反映されたことが示唆された。

**【2012年度】**

①研究題目：知的障害者・大学生共同参加型オープンカレッジにおけるスタッフの学びについて

②概要：杜のまなびやの初期スタッフと後に参加したスタッフの学びの内容を比較した。初期スタッフは自身の保持していた知的障害者観を強めた一方で、後に参加したスタッフは新たな知的障害者観を形成していた。

**【2013年度】**

①研究題目：知的障害者・大学生共同参加型オープンカレッジにおける参加動機と学びの内容 — 共同学習者としての大学生に焦点をあてて—

②概要：大学生は交流を通して障害への学びを深めること、将来に向けた学びを得ることを動機として挙げていた。また、講義を通して平等性やインクルーシブ教育についての意識が高まっていた。

**【2014年度】**

①研究題目：知的障害者における生涯学習体験が日常生活に与える影響  
—知的障害者・大学生共同参加型オープンカレッジにおける学習体験との関連—

②概要：オープンカレッジへの参加により、知識と社会への関心、生活改善への意欲等、日常生活に対する肯定的な影響があることを知的障害者が認識していることが示された。

**【2015年度】**

①研究題目：知的障害者・大学生共同参加型オープンカレッジの取り組みに関する検討 —知的障害者の学習習慣，コミュニケーション，講義内容への関心・考え方に焦点を当てて—

②概要：知的障害者においては、オープンカレッジへの参加を通して、学習習慣の形成、情報を正確に捉えようとする等の変化が生じていた。コミュニケーションについては、日常生活での変化は認められなかった。

**【2016年度】**

①研究題目：知的障害者・大学生共同参加型オープンカレッジにおける「学び合う」討論の展開 —グループ討論における受講者に対するスタッフの働きかけに焦点をあてて—

②概要：グループ討論において司会進行をするスタッフの働きかけの内容を分析した。大きく分けて、進行に関する働きかけ、発言への反応、関連性の指摘、個別的な働きかけ、その他に分けられた。グループの状態やグループメンバーの障害特性などを考慮しながら討論を進めていることが示された。

これまでの研究を整理すると、講師・スタッフを含めたオープンカレッジ参加者の意識に関する検討が多くなされていた。これは、オープンカレッジの目的に照らして、当然の分析視点であろう。このうち、講義担当講師、スタッフ、共同学習者として参加した大学生らの意識に関しては、オープンカレッジに参加することを通じて、知的障害のある受講生との交

	<p>流,あるいは知的障害のある受講生一人ひとりの特性に目を向けることの意義等に気づくといった結果が示されている。しかしながら,知的障害のある受講生については,講義の感想(楽しかった,勉強になった)にとどまっていた。また,本事業は知的障害のある受講生と大学生が交流を深めることや,対等な立場で共同学習をすることをねらいとしているが,知的障害のある受講生は交流や協同に関する言及が大学生と比べて少なかった。その原因として,①講義内容が抽象的であったり難しかったりすること,②共同学習者として共に学ぶことを標榜してはいるものの,実際のところは大学生が知的障害者を援助するという援助-被援助の関係性になりやすいことが考えられる。</p> <p>以上を踏まえると,知的障害のある受講生と大学生の双方が対等な立場で取り組める講義等の在り方について(座学以外の多様な学びの形式も含め),改めて検討する必要がある。また,何度も参加している知的障害のある受講生にオープンカレッジに参加する理由を確認し,彼ら・彼女らにとってのオープンカレッジの存在意味を改めて確認する必要がある。</p>
<p>ス タ ッ フ</p>	<p>野口 和人 (東北大学大学院教育学研究科教授)  藤村 励子 (東北大学大学院教育学研究科博士後期課程)  平野 碧 (東北大学教育学部研究生)</p>